只見短歌会　令和四年十月詠草

夢にのみ出でくる娘汝が孫は国の名背負い海外に行くとふ　馬場　八智

入院の夫を励ます手紙来ぬ曾孫からなり吾も貰ひたし　目黒　富子

手入れさる花壇それぞれ花愛でし初秋の風にコスモスゆらぐ　関谷登美子

好きな時間一年の孫に尋ねれば何もないけど休み時間と言ふ　新国由紀子

朝毎に「薬飲んだ？」と夫に聞き我も忘れむとケースより出す　渡部ヨリ子

茜雲は夕方のみと思ひゐしに今朝の茜に吸ひ込まれをり　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　十月定例会

日高俊平太　指導

稲刈りの夫婦の空や雲幾つ　修一

百日紅飛行機雲の崩れゆく

九十九折り登り終えたる蕎麦の花　紺青

嵐去る赤の残れる曼殊沙華

稲刈りの匂い運ぶ風の音　信

秋晴るる歓喜の絶景只見線

誰の名も咽に支える敬老日　恒夫

もう読まぬ本を選り出す秋時雨

コーヒーは少し熱めに秋の朝　都

友逝きて涙やまざり青芒

新しき畝にとびとび貝割菜　礼

黒土にかがやいている貝割よ

くつひもをきりりと結ぶ竹の春　一恵

小春日や遠山越える旅心

雨浴びて青さ太さを増す大根　一穂

口癖は先に逝くなと冬用意

涼風にボサノバを聴く昼寝かな　真理子

苗植えて水やる夫よ夕日なか

十五夜に祈りを込めた五十年　睦子

栗の味一人ぐらしと共に食べ